

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

八 木 智 生

はじめに

酒吞童子の物語^①には、多くの先行研究が存在する。しかし、各諸本や場面に関する個別の研究、あるいは諸本の分類に関する研究は多いものの、登場人物がどのように描写されているかという観点で諸本の比較を行っているものは少ないように思われる。

そこで今回注目したのは、物語の展開における登場人物の行動である。どの諸本でも、物語のストーリー展開はほぼ共通しているが、場面一つ一つを見ると、行動する人物が異なっていたり、複数の人物が登場する場面において人物によって行動が異なっていたりする。本稿では、特に源頼光・藤原（平井）保昌・渡辺綱の三人の描写について、諸本の比較を行う。

逸翁美術館蔵『大江山絵詞』（以下、逸翁本と称する^②）を基準と

して、サントリー美術館蔵『酒傳童子絵』（以下、サントリー本と称する^③）、洪川版御伽草子二十三篇のうち的一篇、『酒吞童子』（以下、洪川版と称する^④）を取り上げた。

逸翁本は、南北朝～室町前期の成立といわれ、諸本中最古である。先行する諸本分類・伝本系統の研究は、いずれも逸翁本を伝本関係の広くない孤本としている^⑤。先行の諸本分類で、逸翁本以外の諸本はサントリー本の流れを汲んでいることが明らかになっている^⑥。また、サントリー本は逸翁本の次に古い本であり、酒吞童子物語における代表的な本文であるといえよう。洪川版は、先行の諸本分類によれば、サントリー本の流れにあるものの、そこから最も遠い位置にある。成立年代は諸本中最後期に属するが、洪川版御伽草子が人口に膾炙していたことを鑑みれば、一般に理解されている代表的な酒吞童子物語の本文であると思われる。以上の理由から、これらを

仮に酒吞童子物語の代表と指定して、比較対象とした。もちろん、諸本を分類するにはあまりにも少ない数であるが、本稿はあくまでも諸本それぞれの特徴を捉えることを目的としているため、この数に限定している。

各場面の描写を積み重ね、その本がどの人物を強調しているか、あるいは人物をどのように設定しているか考える。これによって、各本の特徴を登場人物という観点から把握することができるのではないかと思う。

一、酒吞童子物語諸本における登場人物に着目した

先行研究

はじめに述べたように、酒吞童子物語の諸本研究は、これまでもなされてきた。主に本文の語句レベルの異同や絵を比較することにより、諸本の前後関係を指定し、系統立てようとするものが中心となっているようである。

本稿では、諸本の影響関係や伝本系統はひとまず置き、逸翁本をはじめとする諸本の本文そのものが、どのような特徴を持っているのかを明らかにしたい。そこで、まずは登場人物の分析によって諸本の特徴をとらえようとした先行研究を確認しておきたい。

まず、逸翁本における頼光と保昌の関係について、柴佳世乃氏は、

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

酒吞童子譚では、頼光が主役のものがほとんどであるが、藤原保昌が主役と同格に扱われているものも見られる。酒吞童子関係の作品の中で最古のものと目される逸翁美術館蔵の『酒吞童子』には、頼光と共に主役として登場するのである。(中略)藤原保昌も源氏の嫡流であった頼光と並立されて理解されているようである。

とし、荒川真一氏も、

香取本・古法眼本に描かれる保昌は頼光と並び立つように描かれるのに対し、洪川版に描かれる保昌は頼光の郎等の一人に組み込まれ、その地位が下落しているのである。

としているように、逸翁本において、頼光と保昌は「同格」と認識されているようである。

洪川版については、右の荒川氏の論以前にも、島内景二氏の論がある。氏は、「話型」という観点で酒吞童子物語の変遷を捉えようとする。その中で、洪川版について、

〔保昌〕は他の頼光の四天王の後に位置し、まるで頼光の臣下であるかの如き扱いを受けている。(中略)頼光を中心とするヒエラルキー(ある意味では、朝廷とは別次元の独立した秩序の観すら呈している)を、(四天王)として整理するために、〔保昌〕を頼光と同格の存在から臣下へと転落させたのである。

しかし、〈保昌〉の名を完全に消去しきつていない点にこそ、かつて保昌が果たしていた役割の大きさが逆に想像されるのである。

二、諸本比較

と述べる。荒川氏と同じように、渋川版の保昌は「頼光の郎等の一人」とされている。

辻田豪史氏は、本稿と同じく、逸翁本・サントリ一本・御伽草子を人物の異同によって比較している。逸翁本については、

逸翁本では明確に頼光・保昌の二将の形式をとっており、保昌は副将的な役割を担っている。

とし、サントリ一本については、

サントリ一本では頼光の四天王、中でも綱が頼光の手足となつて動いている。物語全体において、いわば狂言回しのような役割で、それは保昌を超えた働きである。

として、渋川版については、

保昌と綱がそれぞれ担った役割が頼光に集約され、頼光一人が中心となつて場を進めていくという流れに一本化されたと見てよいだろう。

と述べている。いずれも首肯される評価であろう。

ただし、各先行論ともに、各諸本の人物の行動を概括的にとらえて特徴を導き出している印象である。本稿では、諸本における人物

の描かれ方を、場面ごとの読解により改めて詳細に確認したい。

まずは比較表によって、各場面で三本がそれぞれの人物を行動させているか概観する。

本稿は基本的に逸翁本を主に対象とするものであるから、場面は逸翁本によっており、かつその順序に従っているため、サントリ一本・渋川版は本文の順序が前後している場面がある。(場面9・10・11・16・21・24)は逸翁本のみが存在する場面で、他本の該当箇所には「なし」と示している。また、(場面14・15・19)は逸翁本にのみ存在する。これが逸翁本に元々なかった場面なのか、欠落なのかは不明であるが、比較表には「欠」と示した。

15	童子の疑い	欠	頼光・網	頼光・網
14	舞	欠	公時 網が鬼の舞に怒る	網
13	鬼の酒	1 頼光 2 保昌 (飲む由して捨てられぬ)	3 網 (童子に酌・肴調理)	1 頼光 (童子に酌・肴調理) 2 網 (肴調理)
12	童子との対話	頼光	頼光	頼光
11	部屋に童子を呼ぶ	頼光・保昌	一行は呼ばず、童子が来る。	はじめから童子のいる部屋へ通される。
10	案内の女房との対話	網	鬼が邸内へ連れてゆくため、案内の女房はいない。	鬼が邸内へ連れてゆくため、案内の女房は
9	鬼城門前で案内を乞う	網	鬼に取り囲まれ、そのまま連れ込まれるため、一行と鬼との会話なし。	鬼に取り囲まれ、そのまま連れ込まれるため、一行と鬼との会話なし。
8	洗濯女との対話	頼光・保昌	頼光・網	頼光
7	道中の先導	頼光・白翁	神々	翁
6	神々との対話	頼光	頼光 (網が疑う)	頼光
5	山伏装束に変装	白翁に提案され、装束を頂く	出立前 (誰の提案か記述なし)	出立前に頼光が提案
4	装備の描写	頼光・保昌	頼光・保昌・網	頼光・保昌・網
3	従者	□ 宰小監	なし	なし
		頼光 保昌	網・公時・貞光・末竹	網・公時・定光・季武
2	出立前の参詣	熊野三所・住吉明神	なし	八幡
		頼光 保昌	八幡宮	八幡
1	童子討伐の任命	頼光・保昌	頼光	頼光

逸翁本

サントリー本

波川版

16	鬼の田楽・女房に变じ誘惑	頼光・保昌	なし	なし
17	鬼の城を調べる	頼光・保昌・翁	女房に城の様子を尋ねる(頼光・保昌・綱か)	頼光が女房に聞く
18	童子との戦闘	全員で首を落とす 頼光は綱・公時の兜を借りる 鬼の首が頼光に食い付く 頼光の指示で綱・公時が眼を抉る	綱・公時が切りかかる 頼光が首を落とす 鬼の首が頼光に食い付く(神の甲で無事)	頼光が首を落とす 他が身体を切る 鬼の首が頼光に食い付く(神の甲で無事)
19	その他の鬼との戦闘	欠	頼光・保昌が指示 綱対御號(貞光が助ける) 末竹対霧王	綱対茨木童子(頼光が助ける)
20	本地	一条院・晴明・頼光・四天王	一条院・頼光・酒傳童子	なし
21	形見交換	頼光・保昌	なし	なし
22	上洛描写	頼光・保昌	頼光・保昌	頼光
23	恩賞	頼光	なし	御褒美限りなかりける
		保昌		なし
24	囚われていた唐人を解放	唐人解放	なし	なし

右の表について、いくつかの場面について、逸翁本を中心に諸本を比較し、検討していきたい。

〔場面1〕は、朝廷から酒吞童子討伐を任命される場面である。

ここで任命を受けるのは、一行の中で大将となるべき人物である。

逸翁本を見ると、

摂津守頼光・丹後守保昌などに仰せられて、召さるべき由を

申されければ、諸卿一同して両将を召されぬ。我朝の天下の大
事、是に過ぐべからず。各武勇の志を励まして、「速やかに凶
害の輩を鎮むべし」と仰せ含められしかば、各畏みて罷り出で
らる。

煙霞東西に心なけれども風にあふときはたちまちに飛行すこ
れすなはち□□□たるをや両輩各宿所へ退□□

とある。頼光、保昌の二人が宣旨を受ける。「両将」として両者が同じく宣旨を受けていることは重要で、この二名を同じく將軍としての役職に規定するのである。並立した官職名を両者同様に述べていること、「両将」「各」「両輩」という表現からも、両者が並立に描かれていることがわかるであろう。

一方、サントリー本は、頼光だけが、配下の四天王とともに宣旨を受けている。保昌は、頼光が、「頼光の給けるハ、存する旨あり、(中略)其外ハ保昌をかたらふへし」と出立前に誘うことで参加する。保昌は宣旨を受けていないので、頼光と並立の「將軍」ではない。

洪川版では、「今こゝに頼光を召されつゝ、鬼神討てよとの給はゞ、定光、末武、綱、公時、保昌をはじめとし此人々には鬼神もおぢをのゝきて恐れをなすとうけ給はる。此者共に仰付られ候へかし」と、頼光だけが宣旨を受ける。保昌は、四天王と並立されている。頼光の配下の四天王と同じ位置づけになっているのである。

〈場面2〉は、一行が出立前に寺社で祈念をする場面である。逸翁本では、

□光は八幡三所日吉山王ねんこ□□□□祈念し保昌は熊野三所住吉明神と再三祈申て神馬并に種々重宝色々の幣帛を別当神主等にたてまつらる

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

とある。欠字があるが、頼光と保昌の二名だけが、それぞれ八幡三所と日吉山王、熊野三所と住吉明神に詣でている。四天王は社参に行っていない。任命を受けた「将」が社参へ行くと設定されているのであろう。

サントリー本では、頼光は八幡宮へ、綱・公時は住吉へ、貞光・末竹は熊野山に参詣し、保昌はまだ一行に加わっていないため参加しない。頼光が一人だけで行動している点に、他の人物とは異なるという意識が現れている。洪川版では、頼光と保昌は八幡へ、綱・公時は住吉へ、定光と末武は熊野へと、全員が社参に行っており、特に登場人物の位置づけに関する記述はみられない。

〈場面3〉で、頼光と保昌それぞれが従える人物について明確に述べるのは逸翁本のみである。まず「二人の將軍」に「近国の武士数万騎」を添えるが、頼光が断る。その後、頼光は四天王を、保昌は□宰小監^①一人を従える。当然だが、従者を従えているのはそれぞれ上位の者でなければならぬ。逸翁本は「主人とその郎等」として、ここで頼光と四天王という上下関係と、保昌と□宰小監という上下関係が明示されており、立場の規定がなされている。

他の二本では、四天王が郎等であるということは前提として処理されているようで、語られない。また、洪川版では保昌が四天王と同じように、頼光に同行している。保昌が四天王と並列されている。

〈場面6〉は、道中で出会った神々(の化身)と対話する場面である。逸翁本では、頼光が翁と会話している。ここでの翁の言葉に「両将宣旨を給はりて」とある。「両将」という表現が、頼光と保昌が同じ役割にあることを物語る。

〈場面9〉では、一行が鬼の城に到着し、案内を乞う。逸翁本では、「頼光、綱を召して、「門の内へ入りて案内開け」との給へば」とあり、綱が頼光の郎等として描かれている。逸翁本において、綱が単独で行動するのはこの場面のみである。サントリー本と渋川版では、鬼にそのまま邸内に連れ込まれ、会話をしないため、この場面がない。

〈場面11〉では、一行が案内された部屋に酒吞童子を呼ぶ。サントリー本では、一行が呼ぶのではなく、童子の方から来る。渋川版では、一行ははじめから童子のいる部屋へ通される。よって、これは逸翁本のみにある場面である。「頼光・保昌、同じ詞に」童子を呼ぶ。両者は並立されて行動している。

〈場面13〉は、酒吞童子に勧められた酒を飲む場面である。逸翁本では、まず童子が三盃飲み、次に頼光、保昌の順で飲む。ただし、保昌は飲むふりをしてこれを捨てている。サントリー本では、童子が飲んだ後、頼光、保昌、綱の順で飲む。また、人の股を肴と称して食べる場面があり、頼光と綱だけが食べる。渋川版では、童子の

酒をまず頼光が受け、次に綱が飲む。人の股を肴とする場面では、頼光と綱が食べている。保昌は登場していない。

〈場面14〉では、酒宴が興に入り、舞が行われる。逸翁本にはこの場面がない。サントリー本では、童子の眷属と公時が舞う。綱は舞わないが、鬼の舞に対して反応した様子が描写されている。渋川版では、童子の眷属、いしくま童子と綱が舞う。

〈場面15〉は、同じく酒宴の途中、童子が一行を都からの刺客ではないかと疑う場面である。逸翁本にはこの場面がない。サントリー本では、まず頼光が疑われ、次に「同道の人も伝聞頼光か四点の者とも似たる、中にもあの殿はつら魂人に勝たりと、綱をさして申けり」と、綱が特に名指しして疑われる。保昌の名は出てこない。渋川版では、同じく特に頼光と綱が取り上げられる。保昌は、「頼光が郎等に、定光、末武、公時、綱、保昌」や、「残る四人の人々」として綱以外の四天王と並列されている。

〈場面16〉は逸翁本のみにある場面で、一行の前に、鬼が田楽・渡り物・女房に変じて現れる場面である。頼光と保昌の様子が描写される。

〈場面17〉では、鬼の城内部を調査する人物について確認する。逸翁本では、翁に加え、頼光と保昌が城をめぐる。「目も奇に覚えて、本の廊に帰りて、此の有様を郎等共に語られけり。」とある。

「郎等共」という表現からは、当然ながら頼光と保昌が郎等ではないという前提がある。

サントリー本と渋川版では、鬼の城を実際に見て回るのではなく、囚われた女房の様子を尋ねる。サントリー本では誰が女房に話を聞いていたかの記述がないが、絵には、頼光・保昌・綱の三人が女房と向かい合っている様子が描かれている。綱が頼光・保昌と同じような働きをしていると読めるであろう。また、詞書の「さてハマこと頼光にてましますか、たのもしくこそ思ひまいらすれ」という女房の言葉からは、頼光が一行の中心で代表であるとわかる。渋川版は、頼光だけが女房と会話し、城内の様子を尋ねる。

〈場面18〉は、一行が酒吞童子の首を獲得する場面である。逸翁本は、頼光が中心となっており、綱・公時が脇になって進行する。ただし、「二人の將軍、五人の兵、同心に鬼の頸を打ち落つ」という記述は、頼光と保昌の二將軍という役職を表しているであろう。また、該当の絵では、二人だけが鍬形付きの甲を着用している。これは大将であることを示す印であり、それ以前の絵から、鍬形付きの甲を着用しているのは二名だけである。

サントリー本では、逸翁本と同じく頼光・綱・公時が登場するが、逸翁本のような二將軍という役職に関する記述はない。保昌については、逸翁本が「二人の將軍、五人の兵」とするのに対し、「五人

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

の者とも」という表現で頼光以外の人物をまとめていることから、頼光と同じ「將軍」としての位置づけではないことがわかる。

渋川版ではそれが一層顕著である。保昌はもちろん、綱・公時も登場せず、頼光と酒吞童子の一騎打ちとなっている。

〈場面19〉は、残された眷属の鬼たちと、一行との戦闘である。逸翁本には、この場面の絵はあるものの、該当詞書は欠落している。これを見る限り、特に人物によって差はついていないようである。

サントリー本では、「頼光・保昌はたかき所にゐて、四天王の者共にそ闘はせける」として、頼光と保昌が將軍としての役割にあるが、特に実際の行動は描写されない。サントリー本はこの場面になり筆を割いているのであるが、その中でも目立つのは綱の働きである。四天王それぞれの戦闘が描かれるが、綱の描写が最も長い。また、「綱已下四天王の者共」と表現されており、四天王の中でも綱は一段格上に記述されている。綱はこの場面において頼光や保昌よりも働きを見せているのである。

渋川版では、〈場面15〉で酒吞童子から語られていた、綱と茨木童子の戦闘だけが描写される。その途中、頼光が綱を助ける。その他の人物については、名が出ることはない。

〈場面20〉では、一行の本地が語られる。逸翁本では、一条帝・晴明・頼光・四天王について言及される。サントリー本では、一条

院・頼光・酒吞童子が語られる。保昌、四天王については言及されない。洪川版にはこの場面がない。

〈場面21〉は、逸翁本のみにある、戦後に神々と形見を交換する場面である。まず保昌が提案し、保昌は上矢の鎧を翁に渡し、翁は白浄衣を保昌に渡す。また保昌は太刀を山伏に渡し、山伏は柿の衣を保昌に渡す。次に老僧が提案し、頼光は老僧に兜を重ね、老僧は水精の念珠を頼光に渡す。また頼光は腰の刀を若僧に渡し、若僧は金の錫杖を頼光に渡す。頼光と保昌の二人が神々と形見を交換している。

〈場面22〉では、一行が都に凱旋する様子が描かれる。逸翁本は、二人の大將軍は其の姿を改めず、柿の衣の上に鎧を着、或は頭巾を眉半ばに責め入れて、兜を退け、額に着為して都へぞ入られける。道々、所々、山々、関々に是を見る者、数を知らずぞ有りける。今日既に摂津守頼光・丹後守保昌、鬼王の頸隨身して都へ入る由、聞こへしかば、彼の郎等共、馳せ来りて両将の軍兵大勢なり。(中略) 鬼王の頸といひ、將軍の気色といひ、誠に耳目を驚かしけり。

とする。「二人の大將軍」、「摂津守頼光・丹後守保昌」、「彼の郎等共」「両将」という記述は、両者とともに將軍として扱ひ、並立するものである。

サントリ一本でも同じく、「頼光・保昌、鬼の頸もたせて上り給」として、將軍である頼光と保昌の凱旋が描かれている。洪川版は、

「頼光の御上りを見物せん」と、頼光だけが記述されている。

〈場面23〉では、一行が朝廷から恩賞を頂く。逸翁本では、

丹後守保昌、西夷大將軍に成りて、筑前国を給はりける。頼光は東夷大將軍に成られて、陸奥国をぞ給はりける。

と、頼光と保昌がほぼ同じ恩賞を受け、対になっている。

サントリ一本にはこの場面がない。洪川版では、頼光だけが恩賞を頂く。

〈場面24〉は逸翁本のみにある場面で、戦後、鬼に囚われていた唐人を解放する。特に誰が何をした、という記述はないが、唐人の言葉に、「今両將軍の威力に引かれて魔王の悪害を免る。」、「明王の威験を遠方に伝へ、両將の面目を異朝に施さん」とある。酒吞童子を退治した一行の代表としての二將という認識である。

以上、場面ごとに諸本を人物の働きという観点で比較した。これらをつまみ、諸本の特徴を概観してみたい。

三、各諸本の特徴

ここでは、各諸本が登場人物をどのように描いているかを中心に、それぞれの特徴を考える。

まず、逸翁本は、頼光と保昌の二人が将軍としての立場にあるという記述が特徴的である。

他の本に比べ、保昌の登場回数が単純に多く、存在感がある。頼光が中心となって物語が進行するのは、他本と共通しているが、そのほとんどの場面において、保昌が一緒に行動している。

さらに、頻繁に「両将」「各」「両輩」「二人の将軍」「將軍達」「二人の大將軍」「摂津守頼光・丹後守保昌、鬼王の頸隨身して都へ入る」「両將軍」と、両者をとともに「將軍」という地位に置く記述がある。(場面1)で頼光とともに保昌が任命されるのは逸翁本だけであるが、それが両者の將軍という同一の地位(役職)を保証している根拠である。同時に宣言を受けているのであるから、「二将」となるのは当然である。ゆえに、「二将」として保昌が頻繁に登場するのである。しかし、これらの記述は他の二本にはみられない。逸翁本独自の特徴といえるであろう。

一方、綱をはじめとする四天王は、他の二本と比較すると、登場回数かなり少ない。他の本では多く登場する綱が単独で行動するのは、(場面9・10)のみである。独武者(幸小監)の行動に至っては詞書に登場しない。また、郎等の誰かが頼光や保昌と並立して描写されている場面はない。(場面18)で「二人の將軍、五人の兵」とあるように、頼光と保昌という將軍とその「郎等共」(場面22)、

という立場の差が厳然としてある。

サントリ一本では、保昌の立場が逸翁本よりも下落していることに注目すべきである。それは(場面1)で保昌が宣言を受けないことから明らかで、任命されないということは「將軍」という役職にはならない。また、逸翁本のように「二将」という表現はなく、「丹後守保昌、摂津守頼光」のように役職を並立させる表現もない。当然保昌の立場は頼光と同じであるはずはなく、「將軍」は頼光だけである。それは(場面17)で「二人の女房、さてハマことに頼光にたましますか、たのもしくこそ思ひまいらすれ」と、頼光のみが取り上げられていることから分かる。

しかし、(場面19・22)では、保昌は頼光と並んで大将のような描かれ方をしている。この場面において、保昌の役職と行動について、サントリ一本内で齟齬をきたしているといえよう。サントリ一本以前に頼光と保昌が立場・役柄ともに「二将」となっている本あるいはイメージがあり、その名残をとどめているのであろうか。

また、サントリ一本の特徴として、綱の存在感も挙げられる。登場回数が逸翁本と比較して飛躍的に増えており、(場面2・4・6・8・12・13・14・15・19)では、逸翁本では登場しなかった場面に登場している。それは詞書に限ったことではなく、絵を見ても、多くの場面に綱は描かれている。

そして登場回数が多いだけでなく、〈場面19〉の「綱已下四天王の者共」という記述が顕著なように、同じ立場であるはずの四天王の中でも、一段頭抜けた存在と描かれている。本来、「四天王」というように、頼光の郎等の中で地位や役職が異なるということはないはずであるが、四天王の中で綱だけが突出しているのは明らかである。

さらに、〈場面4・13〉では頼光と保昌に並んでおり、〈場面13・14・15〉では、保昌さえも押しのけて活躍を見せ、特に〈場面15〉では保昌ではなく綱が酒吞童子に名指しされていることから、サントリー本では、保昌よりも重要視されているといえる。

洪川版では〈場面6・8・12〉で綱の登場がなくなっており、頼光や保昌を上回る記述もないため、綱の強調はサントリー本独自の特徴といえよう。

ここで、サントリー本で綱が強調される理由を考えてみたい。綱が活躍する物語は、サントリー本に先行して多く存在する。例えば、『古今著聞集』巻九―一二は、頼光の鬼同丸退治の話、『土蜘蛛草子』・『源平盛衰記』などの頼光と綱の土蜘蛛退治、『太平記』巻三二「鬼丸鬼切の事」・『源平盛衰記』・能「羅生門」にあるような、いわゆる羅生門説話では、綱の鬼退治が描かれている。

これらの説話からは、頼光の忠実な郎等として綱が設定され、ま

た異類退治と結びついていたことがわかる。サントリー本成立の頃にはこれらの説話が浸透していたことは想定されてよく、その影響を受けて、サントリー本では綱が積極的に活躍するのではないだろうか。

洪川版では、保昌の存在感と重要性がさらに低下する。〈場面1〉で任命されないのももちろん、サントリー本で留められていたような、頼光と並ぶ大将格の働きさえもなくなっている。そして、四天王と並べられるのである。〈場面1〉の「定光、末武、綱、公時、保昌をはじめとし」、〈場面15〉の「又頼光が郎等に、定光、末武、公時、綱、保昌」、「さてその次は茨木が腕を切りし綱にてあり。残る四人の人々は定光末武公時や、保昌とこそおぼえたり。」という表現からは、保昌が四天王と同列であり、同じ頼光の郎等として設定されていることがわかる。

綱の働きも、逸翁本よりは多いが、サントリー本よりは回数が控えられている。サントリー本の特徴を述べた際に確認したように、洪川版では〈場面6・8・12〉で綱の登場がなくなっている。

他の二本になく、洪川版独自の表現として特徴的なのは、綱に対する鬼の眷属「茨木童子」¹⁵⁾の存在である。〈場面4・15・19〉にあるように、洪川版では綱と茨木童子の説話を取り込まれている。¹⁶⁾ 「茨木童子」という名は、洪川版制作段階ではすでに膾炙していた

と見られる。例えば、天和元年（二六八二）頃『前太平記』巻二〇「大江山城落事」には、

諺に曰く、大江山の首領は酒顔が腹心の眷属、茨木と云者也。能幻術を行ひ、神通変化の妖鬼也。大江山落城の後、帝幾東寺の羅生門に住て、往来を妨げ人民を害す。

とあり、享保四年（一七一八）八月二日竹本座初演『平家女護島』には、

二たびこゝに羅生門。茨木童子が腕骨にて相手が綱には似ざりけり。

とある。¹⁸これらは洪川版と同じ時期か、それ以前に茨木童子の名が出ているものである。洪川版以前の段階で、綱対茨木童子という、羅生門説話に基づく対立構造がすでに準備されているのである。

島内景二氏は、洪川版を、それ以前の諸本の、「天皇―二将―四天王」対「童子―二天―四天王」という対応関係から、「頼光―四天王」対「童子―四天王」という構造へ移行している段階であると位置づけている。¹⁹荒川真一氏は島内氏の論を下敷きに、

頼光 ― 綱 ― 貞光・季武・公時・保昌

酒吞童子―茨木童子―ほしくま童子・くま童子・とらくま童

子・かね童子

という「対立項」に基づく「均整美」を指摘し、綱と茨木童子とい

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

う「対立項」が設定されているのだという。²⁰

今回、綱が登場する場面の描写の検討によって、頼光対酒吞童子・綱対茨木童子という対立構造を確かめることができた。綱に対するのは茨木童子である、という関係を、洪川版は明確に意識している。洪川版では、綱は茨木童子と対置される場面のみ登場するのである。サントリー本では、綱は事あるごとに前面に押し出されていたが、綱に対する特定の鬼という対立構造はない。洪川版では、羅生門説話による対立構造が本文に反映されていることによつて、逆に綱の働きがそこに絞り込まれるのである。²¹

保昌・綱の登場回数が増減したことにより、先行研究が指摘するように、洪川版は他の二本に比べ頼光一人での働きの多くなる。〈場面5・6・8・12・17・22・23〉は、他本で頼光以外の人物が行動していたところが、洪川版で頼光だけの働きになっている場面である。また、〈場面1・23〉に明確なように、「將軍」は頼光だけである。

その結果、頼光と酒吞童子、綱と茨木童子という主従それぞれの対立構造が構築される。その他の人物を排除していった結果、頼光が酒吞童子を退治するという物語が明確になり、それに綱と茨木童子の羅生門説話の統編²²が付随する。サントリー本のように、前代からの保昌や綱の役割を踏襲せず、茨木童子の物語だけを採用したた

めに、頼光の酒吞童子退治物語として完成されたのである。

まとめ

ここまで、各先行研究が述べてきたことを本文の記述に即して確かめる形で、登場人物の描かれ方を中心に、各諸本について考察してきた。最後にまとめておきたい。

逸翁本の特徴とは、頼光と保昌を「二将」として、將軍という同一の立場に置いていることがまず挙げられる。また、物語中において行動するのはほぼ彼ら二人であり、他本と比べて保昌の存在感、役職が高いものになっている。

サントリー本では、まず保昌は將軍という役職にはなく、しかし一部で將軍としての描写をされているのが特徴である。また、綱の登場回数が多く、位置づけも他の四天王よりも一段上で、頼光・保昌に並ぶ働きさえある。どちらも、先行する諸本ないし前代からの説話伝承の影響を強く反映したものではないかと考えた。

洪川版では、保昌の役職・行動ともに四天王と並列になっている。また、綱は茨木童子と対置され、活躍は絞り込まれている。結果、頼光の酒吞童子退治の物語という構成が浮かび上がっている。

三本を比較して、頼光は一貫して中心人物として描かれている。最も顕著に違いが表れているのは、保昌についての異同であろう。

逸翁本では「二将」として頼光と同じ地位に置かれ登場回数も多かったものが、洪川版では四天王と並立され、行動も描かれない。サントリー本はその中間ともいえるべき本であろう。保昌が將軍であり、それに見合う存在感があるという描き方が、徐々に失われていく過程を示している。

また、興味深いのは綱の描き方である。逸翁本成立以前にも綱に関する説話はあつたはずだが、逸翁本にはほぼ表れておらず、頼光と保昌に焦点が当てられている。また、いわゆる羅生門説話との関わりについても諸本により異同がある。逸翁本では存在せず、洪川版では明確なのに対し、サントリー本では関連説話の影響を匂わせるものの特定の説話を取り込んだというわけではなさそうである。ちなみに、サントリー本の影響下にある中京大本「しゅてんとうしの物語」²³には、「屋代本平家物語」剣巻にある一条戻り橋での鬼切説話が挿入されているが、鬼の名は「ひらき」である。綱の行動と羅生門説話については諸本に異同があり、これによって諸本を系統立て、分類できる可能性も開かれているのではなからうか。

最後に、逸翁本に関する問題を提示しておきたい。今回、逸翁本の特徴として、頼光と保昌の「二将」という設定を挙げた。しかし、両者は役職に言及する記述については同一であるものの、その行動は大きく異なっていることがある。同じ「將軍」という立場にあり

ながら行動に差があるというのは、三本中逸翁本にのみ見られるもので、ここに逸翁本の独自性をさらに追及できる可能性がある。この問題については、今後の課題としたい。

注

① 本稿で言う「酒吞童子物語」とは、源頼光をはじめとする一行が、酒吞童子を討伐する、というあらすじを持つ物語を一括した呼称である。絵巻、版本等の形式や本文の異同を問わず、諸本をすべて含む。

② 本稿で言う「逸翁本」とは、逸翁美術館に所蔵されている上下二巻の絵巻と、それに付属する同館所蔵の詞書一卷（別巻詞書と称する）に加え、陽明文庫所蔵の詞書のみを写本『酒天童子物語絵詞』の総称である。上下巻の絵巻は錯簡が多く、絵と詞書の段数も一致しない。しかし、別巻詞書の内容は、絵巻の絵と、細かい点を含めて完全に一致しており、陽明文庫本も、同じく絵巻の絵と完全に一致している。もちろん、なお検討が必要であるが、本稿ではこれらによって内容を補うことにする。具体的には、〈場面2〜4〉は陽明文庫本、〈場面20〜24〉は別巻詞書に よっている。

上下巻の絵巻、別巻詞書、陽明文庫本ともに、本文と絵は小松茂美編『続日本絵巻大成』十九（中央公論社、一九八四年）を使用している。それらの詳細な対応関係については、同書に収録されている、榊原悟「大江山絵詞」小解」に譲りたい。

③ 本文は、『大日本史料』九一〇（東京大学出版会、一九九四年）を使用している。絵は、逸翁美術館編『絵巻大江山酒吞童子・芦引絵の世界』（思文閣出版、二〇一二年）を参照した。

登場人物からみる酒吞童子物語諸本の特徴

④ 本文は、市古貞治校注 日本古典文学大系『御伽草子』（岩波書店、一九五八年）を使用している。絵は、国文学研究資料館「館蔵和古書目録データベース」『御伽草子』を参照した。

⑤ 酒吞童子物語の諸本研究は数多い。例えば、勝俣隆「御伽草子『酒吞童子』の一挿絵と本文について」（『愛文』二七、一九九二年一月）、同「御伽草子『酒吞童子』の一場面における二系統成立に関する考察」（『静大国文』三六、一九九二年四月）、池田敬子「しめてん童子」の說話」（『説話論集』八、一九九八年三月）、島津忠夫「大東急記念文庫蔵『大江山絵詞』をめぐって」（『国語国文』七四、二〇〇五年二月）、安藤秀幸「酒吞童子」諸本論再考」（『国語国文』八四、二〇一五年九月）など。

⑥ 島津氏、安藤氏前掲論文など。

⑦ 柴佳世乃「藤原保昌考——その二面性と説話形成——」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』四六、一九九三年三月）。

⑧ 荒川真一「酒吞童子説話研究」（『語文』一四五、二〇一三年四月）。

⑨ 島内景二「御伽草子の精神史」一三五頁、ベリかん社、一九八八年。

⑩ 辻田豪史「酒傳童子話変遷の側面——登場人物の異同と頼光像の再編成」（『国文学研究』一三六、二〇〇二年三月）。

⑪ 本文に欠字があるため、□で示した。「大宰小監」か。

⑫ 逸翁本では、頼光・保昌・四天王・独武者の合計七人であるが、サントリ一本では独武者がいらないため、一行の合計は六人となる。すなわち、頼光とその他五人である。

⑬ 宣旨が重要であることは〈場面23〉で両者の恩賞が対になっていることや、〈場面20〉での「宣旨を蒙り給へる將軍達にておはしませば、打ち平げん事は左右に及ばねども」という翁の言葉からも確かめられる。

⑭ これは必ずしも逸翁本を意味しない。

⑮ 茨木童子に関する先行研究には、島津久基『羅生門の鬼』（一九七五年、平凡社）や、川鍋仁美「茨木童子研究」（『日本文学』二〇八、二〇一二年三月）がある。

⑯ いわゆる羅生門説話である。

⑰ 板垣俊一校訂 叢書江戸文庫『前太平記』下、国書刊行会、一九八九年。

⑱ 阪口弘之校注・訳 新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』三、小学館、二〇〇〇年。

⑲ 島内景二『御伽草子の精神史』一三三—一三四頁（前掲）。

⑳ 荒川真一「酒吞童子説話研究」（前掲）。

㉑ サントリー本は、綱と特定の鬼との対立構造を描かない。しかし前代の説話によって、一行の中では特別視されているために、多くの仕事を与えられる。場面を絞り込まれずに頻繁に登場するのは、特定の相手との対立構造を持たないためではないだろうか。

㉒ 〈場面15〉では、

過ぎつる春の事なるに、それがしが召し使ふ茨木童子といふ鬼を、都へ使に上せし時、七条の堀河にてかの綱に渡りあふ。茨木やがて心得て女の姿に様をかへ、綱があたりに立ち寄り、もどりむすとり取り、つかんで来んとせしところを、綱此よし見るよりも、三尺五寸するりと抜き、茨木が片腕を水もたまず打ち落す。やうく武略をめぐらして、腕を取返し今は子細も候はず。

という酒吞童子の語りがあり、〈場面19〉には、

あまたの鬼のその中に茨木童子と名のりて、「主を討つやつばらに、手並の程を見せん」とて面も振らずかゝりける。綱は此よし見るよりも、「手並の程は知りつらん、目に物見せてくれん」とて、追ふつまくつつしばしが程戦ひけれ共、さらに勝負は見えざりけり。

とある。

㉓ 長谷川端「酒吞童子絵巻翻刻・略解題」（『中京大学図書館学紀要』二六、二〇〇五年五月）。